

大学教員などが実施する保育研究と保育者の協力の実態について ——研究に対する保育者の意識の検討——

丸山良平* 原野明子**

(平成10年4月30日受理)

要 旨

本研究は、大学の教員や学生などが幼児教育の実践現場で行っている研究の実態を明らかにし、それに対する保育者の感想や評価を解明することを目的とする。そのために幼稚園などに勤務している保育者に対して質問紙調査を実施し、回収された126人分の分析を行った。得られた主要な結果は以下の通りである。1. 保育者は自分の保育をビデオ収録されるのを好まない。2. 大学教員や学生が研究に協力した保育者に研究成果を伝えないことがある。3. 保育者は必ずしも大学教員を信頼しているとは限らない。こうした結果を基に、大学教員や学生が研究実施に際して留意すべき点について考察した。

KEY WORDS

Early childhood education 幼児教育 Practical studies 実践的研究
Ethical principles of research 研究の倫理 Preschool teacher 保育者

問 題

保育研究では資料収集を保育実践の現場で行うことが多い。最近では実践現場における乳幼児と保育者の行動を観察したり、ビデオ収録して得た資料を分析し、乳幼児の行動や心身の発達と保育者の働きかけの関係などを検討するような保育実践に関する研究がさかん行われている。保育実践の現場は保育研究のフィールドとしてその重要性はさらに増しているといえよう。

研究における倫理に関して、日本でもアメリカ心理学会(1992/1996)が刊行した倫理綱領・行動規範が翻訳されるなど、注目されるようになった。最近では保育研究に焦点を絞って、保育観の確認と実験の是非に関して検討した報告(岸井, 1997)や、保育研究の特殊性に言及し、それを考慮して研究を進めるための倫理を検討した報告(久世, 1997)などが行われている。

保育研究を行うのは実践現場に在職する保育者はもちろん、大学や行政機関に在職する教員、研究者などである。こうした研究者の多くは、いつでも自由に乳幼児と関わったり観察したりできる実践現場を持たない。実践現場の外にいる研究者が保育研究を行うためには、保育者と共同で研究を行うか、保育実践を観察させてもらうなど保育者の協力が必要である。そしてたいの研究者はそのようにして研究を実施してきたのである。

* 幼児教育講座

** 県立新潟女子短期大学幼児教育学科

それではそうした共同研究や研究の協力がスムーズに行われてきたかという点、そうではないようである。研究者と保育者が相互に理解し合い、「本音」で付き合っただけで研究を進めることはなかなか難しいという(大豆生田, 1997)。さらに高杉(1997)は研究者と保育者とは、研究の対象者的な関係、あるいは上意下達的な関係にあったのではないかと述べている。このようにさまざまな問題があると推測されているが、保育研究の実施に関わる研究者と保育者との関係についての実証的な検討は、これまであまり行われていない。

そこで本研究では、研究機関の一つである大学が実施する保育研究とそれに対する保育者の参加・協力の実態と、その実態に関して保育者が持っている意識を追究することを目的とした。具体的には保育者に対して質問紙調査を行い、大学の教員や学生などが保育実践の現場で行っている保育研究の方法・内容を明らかにし、それに対する保育者の印象・評価を解明する。そして研究者が研究実施に際して留意する点を考察をする。

なお本研究でいう共同研究とは、保育者が研究の立案から実施、そのまとめまでの大半に参加して行う研究であり、研究の協力とは、大学教員の研究や学生の卒業研究などのために、保育者が保育実践を観察・ビデオ収録させたり、幼児の特徴や行動特性、家庭状況などの資料を提供したり、幼児の保護者への質問紙の配布、回収を代わって行うことや保育者自身が質問紙に回答するなどである。また研究者とは研究の実施責任者を指し、大学の教員、大学院学生と学部学生を意味している。

方 法

(1) 対 象

新潟県内の14園に勤務する園長を含む常勤の保育者156人である。

(2) 調査時期と手続き

1997年12月から1998年1月にかけて実施した。事前に各園の責任者の了承を得てから、調査用紙を郵送もしくは筆者が直接園に届けた。回収は約3週間後に郵送もしくは筆者が園に受け取りにいった。回収した調査用紙は126部で、回収率は81%であった。

(3) 質 問 項 目

回答は基本的にはいくつかの選択肢から該当するものを1つ以上選択してもらうが、該当する項目がない場合は具体的に記述してもらった。

① 回答者の個人条件

性別、年齢、保育者の新任当時に0年とした教職年数、そして役職を質問した。

② 個人的に参加した共同研究の経験

これまでに大学との共同研究に個人的に参加した回数、多い場合は年間の平均回数、研究の方法と内容、そして研究成果の利用について尋ねた。

③ 園全体で参加した共同研究の経験

これまでに大学との共同研究に園が加わり、回答者本人が参加した回数・多い場合は年間の平均回数、研究の方法と内容、そして研究成果の利用について質問した。

④ 参加したい共同研究

今後、個人及び園全体で参加してもよいと考える研究について尋ねた。そこで参加したい研

究が「ない」と回答した場合、さらにその理由を質問した。

⑤ 研究への協力の経験

これまでに行った研究協力の回数・多い場合は年間の平均回数、研究の方法と内容、そしてできあがった報告書（学術論文や学位論文を含めて、ここではすべて報告書と呼ぶ）の受け渡しと研究成果の利用状況について尋ねた。

⑥ 協力したい研究と報告書の扱い

今後、協力してもよいと考える研究について尋ねた。そこで「協力したくない」と回答した場合、さらにその理由を質問した。また報告書の受け渡しをどのようにして欲しいかを尋ねた。

⑦ 共同研究への参加や研究協力の要請を拒否した理由

これまで共同研究への参加要請や研究協力の依頼に対して拒否したり、もしくは拒否したいと考えたりしたことがある場合、その理由を尋ねた。

結果と考察

1. 回答者について

回答者126人のうち男性は7人、女性は119人である。平均年齢は32.3歳(SD=11.8, Range=20-79), 平均教職年数は8.6年(SD=9.2, Range=0-40)である。回答者の役職についてみると、園長6人、副園長4人、教頭2人、主任7人、教諭・保母104人、非常勤講師3人であった。回答者のほとんどがクラス担任として日々保育をしている保育者であった。そこで以降、勤務年数や役職で特に区別せず分析し、考察することにした。

2. 大学との共同研究について

(1) 共同研究の実施状況

個人的に共同研究に参加した経験者は6人で、いずれもその回数はこれまでに4回以下であった。共同研究の方法・内容は、自分自身(回答した保育者)の保育を観察・ビデオ収録して、指導の方法と内容を検討するものが2件であった。乳幼児を観察・ビデオ収録して、その行動と心理を検討した研究、標準的な発達検査、就学後の追跡調査、描画技能の発達検査を行った研究が各1件であった。具体的には明確ではないが、方法・内容ともさまざまである。

個人参加の共同研究の成果の利用では、乳幼児理解や保育にかなり反映できたとの回答は3人、少しは反映できたとの回答も3人で、全員が成果を利用できたと評価している。

園全体での共同研究に参加した経験者は10人である。その回数が年平均で5回に達するのが1人、年平均で2・3回が3人、これまでに4回以下が6人であった。共同研究の方法・内容は、園の指導計画や実践記録を検討した研究、および乳幼児を観察・ビデオ収録してその行動と心理を検討した研究が各5件であった。同僚の保育者を観察・ビデオ収録して指導の方法と内容を検討した研究と、乳幼児の保護者に質問紙調査してその意識を検討した研究は各4件、自分の保育を観察・ビデオ収録して、指導の方法と内容を検討した研究は2件であった。

園全体参加での共同研究の成果の利用では、乳幼児の理解や保育に少しは反映できたが5人、ほとんど反映できなかったが3人、分からないが2人であった。

園全体参加の場合では個人参加に比べ、園の指導計画を分析したり、実践記録を分析して指導の方法や内容を検討するなどの研究と、保護者の意識を調査して乳幼児の家庭での生活や指

導という乳幼児のバックグラウンドを検討する研究が行われる。研究対象が広範囲にわたり、調査の規模も大きくなる傾向があるようだ。研究成果に関しては、人数が少なく統計的に検討はできないが、園全体参加の研究の方が個人参加の場合より成果を乳幼児の理解や保育に反映できない傾向にあることが示唆された。

(2) 個人的に参加したい共同研究

共同研究の経験者は15人（1人は個人、園全体の両方の経験を持つ）で、未経験者は111人であった。共同研究の経験者数が少ないので、その経験の有無で区別せずに回答者126人が参加したい共同研究として選択した結果をTable1に示した。

研究対象・方法・内容	選択率 (%)
・乳幼児を観察・ビデオ収録して、その行動と心理の研究	37
・自分の保育を観察・ビデオ収録して、指導方法の研究	18
・乳幼児の保護者に質問紙調査して、その意識の研究	18
・園の指導計画や実践記録を分析して、指導方法・内容の研究	9
・乳幼児の保健・健康に関する研究	2
・どのような研究でもよい	2
・自分以外の保育者の保育を分析して指導方法の研究	1
・共同研究には参加したくない	27

最も選択率の高い研究は乳幼児を観察・ビデオ収録してその行動と心理を検討する研究が37%である。次いで自分の保育を観察・ビデオ収録して指導の方法と内容を検討する研究と保護者に質問紙調査してその意識を検討する研究が共に18%である。指導方法・内容の検討でも、園の指導計画や実践記録を分析する研究は10%にも満たない。乳幼児の行動や心理、自分が行っている指導方法の検討など、日常の保育実践や保育技術に直結する研究が多く望まれている。

項目の内容	選択数
・適当なテーマを思い付かないから	24
・共同といっても、保育者は資料を提供するだけだから	4
・研究成果が期待できないから	3
・自分の保育を観察されるのは嫌だから	1
・大学の教員は乳幼児や保育を知っているとは思えないから	1
・ビデオ収録では保育者は構えて、通常の保育ができないから	1
・無答	1

参加したくないという回答は全体の27%であった。そう回答した34人が選択した理由をTable2に示した。適当なテーマを思い付かないが24人である。次いで共同といっても保育実践者は資料を提供するだけだからが4人、成果が期待できないからが3人である。成果が期待できないとする1人と大学の教員が乳幼児や保育を知っているとは思えないとする1人は共同研究の経験者であった。その2人は共同研究の成果を乳幼児の理解や保育にほとんど反映させるこ

とがなかったと答えている。これまでの経験に基づいての判断を推測する。

(3) 園全体で参加するときに加わりたい共同研究

園全体で参加するときに加わりたい研究の選択率を Table3に示した。

研究対象・方法・内容	選択率 (%)
・乳幼児を観察・ビデオ収録する行動と心理の研究	31
・園の指導計画や実践記録を分析する指導方法・内容の研究	28
・乳幼児の保護者に質問紙調査して、その意識の研究	25
・同僚保育者の保育を観察・ビデオ収録する指導方法の研究	22
・自分の保育を観察・ビデオ収録する指導方法の研究	10
・園の研究テーマと同じ研究	1
・共同研究には加わりたくない	22

最も選択率の高いのは観察・ビデオ収録による乳幼児の行動と心理の検討が31%である。次いで園の指導計画や実践記録の検討が28%、質問紙による保護者の意識の検討が25%である。自分の保育を観察・ビデオ収録する指導方法や内容の検討は10%である。

各研究の選択率とそれと対応する個人的に参加してもよい共同研究の選択率と比較すると、園の指導計画や実践記録を分析する指導方法の研究のみに有意差があり、園全体の場合の選択率が高い(p<.01)。指導計画や実践記録などの筆記記録を分析する方法は多くの保育者が共同で分析し、検討を加えることで成果があがる研究と考えられているようだ。

園全体の共同研究において保育を観察・ビデオ収録する方法では同僚保育者を対象とする研究の選択率が22%で、自分自身を対象とする研究の10%より高く、その差は有意(p<.05)である。保育者はできるならば自分自身の行動や自分の保育を検討対象にしたいくないという意識を持っていると解釈する。

項目の内容	選択数
・適当なテーマを思い付かないから	19
・共同といっても、保育実践者は資料を提供するだけだから	5
・大学の教員は乳幼児や保育を知っているとは思えないから	3
・研究成果が期待できないから	2
・園内研究もあり、保育をやりながら共同研究をするのは無理だから	1

園全体が参加する共同研究には加わりたくないとの回答は全体の22%であった。そう回答した28人の理由を Table4に示した。適当なテーマを思い付かないが19人である。次いで共同といっても保育者は資料を提供するだけだからが5人、成果が期待できないからが2人である。大学の教員が乳幼児や保育を知っているとは思えないが3人である。この選択の傾向は個人的な参加の場合と同じである。

成果が期待できないとする1人と大学の教員が乳幼児や保育を知っているとは思えないとする3人のすべては共同研究の経験者であった。こうした意識を少数ではあるものの保育者が

持っているのは、研究者が保育者の信頼を損ねる行動をとったことを示唆する。

3. 研究者が行う保育研究への協力について

(1) 研究協力の状況

これまでに研究協力をした経験者は88人で、回答者の7割に当たる。その経験者が研究協力をした回数・頻度を Table5に示した。

研究に協力した回数	該当率 (%)
・これまでに4回以下	32
・これまでに5回から10回程度	14
・年に平均して1回	9
・年に平均して2・3回	32
・年に平均して4・5回	8
・年に平均して20回	6

これまでに4回以下と年間の平均回数2・3回が32%で最も多い。最も頻繁に協力している保育者は年間平均で20回に及ぶ。研究協力の回数が1年間に2回以上になっている保育者は46%に達する。これは研究協力をしている保育者に偏りがあることを示す。

研究協力の経験者の教職年数の平均値は12.0年 (SD=10.82) で、未経験者のそれは4.9年 (SD=6.24) で、平均値に有意差 ($t(113.79)=4.62, p<.01$) がある。研究に協力する保育者は一般に教職年数が高い。さらに研究協力の回数が1年間に2回以上の保育者の教職年数は14.4年 (SD=10.67) で、それが年1回の保育者のそれは10.0年 (SD=10.65) で、その差は有意傾向 ($t(86)=1.90, .05<p<.10$) である。教職年数の長い保育者に研究協力が集中する。研究者が保育者を指定して協力要請することはふつうないから、協力要請があると教職年数の長い保育者がそれを受けるといえよう。

(2) 協力した研究の方法・内容

保育者がこれまでに協力した保育研究の方法・内容を Table6に示した。

研究対象・方法	選択率 (%)
・乳幼児の保護者に質問紙調査して、その意識などの研究	61
・乳幼児を観察・ビデオ収録して、その行動と心理の研究	57
・同僚保育者の保育を観察・ビデオ収録して指導方法の研究	16
・保育者を対象に質問紙調査して、その意識などの研究	13
・自分の保育を観察・ビデオ収録して指導方法の研究	11
・園の指導計画や実践記録を分析して、指導方法・内容の研究	8
・幼児を面接調査して行ういろいろな発達研究	1

最も多い研究は保護者に対する質問紙調査が61%で、次いで乳幼児の観察・ビデオ収録が57%である。同僚保育者や自分自身の行動を観察・ビデオ収録するものや保育者に対する質問紙調

査はそれぞれ15%前後である。

家庭における教育や乳幼児の行動を質問紙調査によって検討する研究や、園での乳幼児の行動観察によって発達を捉える研究への協力はさかんに行われる。しかし、保育者の保育活動を対象にする研究は多くないし、さらに幼児に面接するような研究はごく少ない。そうした研究の意義は大きく、研究者の意欲が低いとは考えにくい。こうした保育者を対象とする研究ではその行動や意識を批判することもあるだろうし、幼児をひとりずつ面接調査する研究は長時間を要し、会場の確保など保育者の負担も大きい。それで研究者はこうした研究を避ける傾向にあり、さらに保育者も同じ理由でその研究の協力を避ける傾向を持つと推測する。

(3) 報告書の受け渡しと研究成果の利用

協力した研究をまとめた報告書の受け渡しの状況を Table7に、そして Table8に保育者の研究成果の利用状況を示した。

Table7 報告書の受け渡し		n=88
受け渡しの状況		該当率 (%)
・研究者が報告書を園に持参し、研究結果を説明した		32
・報告書が礼状と共に郵送されてきた		40
・報告書が送られてこなかった		36
・報告書を見たことがないので、どうなったのかわからない		17

報告書を協力園に持参して説明したり、礼状を添えて郵送する場合が合わせて72%である。しかし、そうした報告書が送られなかったり、そうしたものを見たことがない場合も53%にも達している。研究者が協力してもらった研究の経緯や結果について保育者にまったく報告しない研究がかなりある。これは研究者が保育者の研究協力とはデータ収集の協力であると考えていることを示唆するものである。

Table8 研究成果の利用		n=88
利用の状況		該当率 (%)
乳幼児理解や保育に		
・ほとんど反映させることはなかった		46
・わからない (研究成果を知らない)		35
・少しは反映させることができた		13
・かなり反映させることができた		2
・無回答		5

協力した研究の成果を乳幼児の理解や保育に反映できたのは15%とわずかで、研究協力の経験者の80%以上が反映できない、わからないという否定的な意識を持つ。これは研究の目的、必要性が研究者のものであり、それが保育者の目的や興味と異なることにもよるのであろう。しかし、これでは研究の協力は保育者がデータを提供するだけの一方的な協力になっていて、保育者側には何のメリットもない。こうしたことが行われ続けければ、研究協力の要請を拒否しなくなるのは当然である。研究者が事前に研究の意図や目的、予想される研究の成果などを説

明し、研究終了後にはその経緯や研究成果を伝えていけば、このような状況を選けられるのではないだろうか。

(4) 保育者が協力してもよいと考える研究の内容

研究協力の経験の有無によって協力してもよい研究の選択率に差がないので、回答者全体の選択率を Table9 に示した。

研究対象・方法	選択率 (%)
・結果が自分の保育方法の参考になりそうな研究	60
・乳幼児を観察・ビデオ収録して資料収集する研究	29
・自分が興味あり、学びたいと思っているテーマに関する研究	29
・乳幼児の保護者を対象に質問紙調査で資料収集する研究	29
・保育者を対象に質問紙調査で資料収集する研究	25
・結果が自分の乳幼児の理解を促すような研究	22
・幼児教育の進歩のためにどのような研究でも協力したい	13
・園の指導計画や実践記録を分析する研究	10
・同僚保育者の保育を観察・ビデオ収録し、検討する研究	7
・自分の保育を観察・ビデオ収録し、検討する研究	7
・協力したくない	9

協力したくないは9%で、保育者の多くは研究の協力を好意的であるといえる。協力してもよい研究として、結果が保育方法の参考になりそうな研究、乳幼児を観察・ビデオ収録して分析する研究、自分が学びたいテーマに関する研究、結果が自分の乳幼児の理解を促すような研究などの選択率は高く、保育者自身が興味ある乳幼児の行動や心理、指導方法の研究に協力して自分も学びたいと期待していることがわかる。

同僚保育者や自分自身の保育を観察・ビデオ収録した資料を分析するような研究の選択率は共に7%と低く、園の指導計画や実践記録を分析する方法の研究の選択率も10%と低い。この結果は、保育者は自分を対象とする研究は避けたいとの意識を持ち、実践記録などの分析では多くの保育者が共同で実施して成果を得られると考えていることを示すものである。

(5) 研究に協力したくない理由

項目の内容	選択数
・保育者は資料を提供するだけだから	6
・そうした研究が幼児教育に貢献するとは思えないから	3
・園や自分の保育を批判されるのは困るから	2
・研究成果が期待できないから	2
・保育の邪魔になるだけだから	1
・1,2回の観察なのに、保育を断定的に批判するなど雑だから	1
・大学側の研究と自分のしたい研究が異なるから	1

協力したい研究が「ない」と回答した11人のあげた理由を Table10に示した。11人のうち9人が研究協力の経験者である。

選択数の最も多いのは、保育者は資料を提供するだけだからが6人で、次にそうした研究が幼児教育に貢献するとは思えないが3人、成果が期待できないから、園や自分の保育を批判されるのは困るからは共に2人であった。

研究の協力といっても単に資料を提供するだけで、結果のフィードバックをえられないということであろう。また研究の成果が期待できないとか幼児教育に貢献するとは思えないという批判は、研究の目的が保育者に理解されていないことによるものであろう。

(6) 報告書の受け渡しに対する希望

研究協力の経験の有無によって報告書の受け渡しに対する希望の選択率に差がないので、回答者全体の選択率を Table11に示した。

項目の内容	該当率 (%)
・持参、郵送どちらでもよいが報告書は必ず見せて欲しい	63
・報告書と生データの両方を提供して欲しい	17
・報告書もデータも不要である	2
・わからない（特に希望はない、無答）	18

研究の報告書を提供し、見せて欲しいという要望は80%に達する。さらに生データの提供をして欲しいという要望も17%ある。協力した研究は保育者にとって自分や自分の指導する子どもたち、その保護者が対象となったものである。保育者はその研究の成果を知りたい以上に、自分の保育実践や子どもたちの発達がどのように捉えられ、どのように解釈されたかを知りたいのである。なぜならば保育者はそれにもっとも興味があるからである。

その一方で、わからない、報告書もデータも不要であるとの選択率を合わせると20%になる。これはこれまでに研究に協力してきても報告書を提供されない場合も多くあるし、協力してもあまり有益な情報を得られなかったことに対する反応であろう。そうした経験を積んで、研究者の行う研究そのものに興味を持てなくなり、さらに彼らに対して不信感を持つまでになっていると解釈できよう。

(7) 共同研究の参加や研究協力を拒否した理由

共同研究もしくは研究協力を経験したことのある保育者が、これまでに共同研究の参加要請や研究協力を拒否した理由もしくは受諾したものの本当は拒否したいと考えたときの理由として選択した結果を Table12に示した。共同研究の経験者の全員が研究協力を経験を持っていたので検討の対象は88人である。

最も選択率の高いものは、園の行事などの都合で日程が取れなかったが39%である。次いで、研究の意図が不明確であったが23%、自分が保育者として未熟で研究協力に自信がなかったが14%と続く。

研究の期間は、幼児が落ち着いてふだんの保育活動を展開している時期に設定されるのがふつうである。そういう時期では園の方でもいろいろな行事を取り入れて保育を進めるのは当然であろう。従って研究の期間が園の行事の日程と重なる傾向にあるのは必然であり、常に起り

得る問題であるといえよう。

研究の意図が不明確という項目が選択されるのは、研究者側の説明が不十分であることを示す。事前に書面などに目的、方法を記述して、さらにそれを口頭でも説明する必要がある。

Table12 共同研究の参加・研究協力を拒否した理由 n=88

項目の内容	選択率 (%)
・園の行事が詰まっていた、日程が取れなかった	39
・研究の意図が不明確であった	23
・自分が保育者として未熟で、研究への参加・協力を自信がなかった	14
・ワイアレスマイクを使い保育者の全発話を記録することが嫌だった	13
・質問紙調査の依頼が頻繁で保護者から苦情がでそうだった	11
・保育者の行動をビデオ収録することが嫌だった	8
・乳幼児の行動をビデオ収録することが嫌だった	7
・他の研究に協力していたので負担が大きかった	7
・指導計画や実践記録を資料として要求するものだった	1
・特に拒否したことはなかった	10
・無答	24

自分が保育者として未熟で、研究協力を自信がないというのは、研究協力することに責任を感じているからと解釈できる。他の研究に既に協力していたのにさらに別の研究の協力を求められて負担が大きかった、そして保護者に対する質問紙調査などの協力依頼が頻繁にあって、苦情が出そうだった、の2項目の選択率は10%前後と高くないが、これは協力依頼が特定の園や保育者に集中していることを示すものである。

ビデオによって幼児の行動、同僚保育者や自分自身の行動を観察・記録することに反感を持つことは多少あるが、それ以上にワイアレスマイクを保育者に付けてすべての発話を記録する方法には13%が拒否を示した。研究者は確実な資料収集のためにオーディオビジュアル機器に頼る傾向を強めているが、保育者はそれに反感を持っていることが示された。

全体考察

1. 保育者の保育研究に対する感想と評価

今日の観察ではオーディオビジュアル機器は必ずといってよいほど使用される。しかし保育者は自分の保育実践を観察・ビデオ収録する研究方法を好んでいないことが示された。特に自分自身が研究のパートナーとして参加しない研究協力ではその傾向が強くみられた。保育者の多くはできるならば自分自身の行動や自分の保育実践を研究の対象にして欲しくないという意識を持っているのである。質問紙の欄外に「ビデオで保育を収録されると保育者はそれを意識して構えてしまいふだんの保育ができなくなる」という内容の記述が複数あった。これはビデオカメラを向けられる保育者の率直な心情であろう。さらにワイアレスマイクを併用することには反感が強かった。マイクを付けられた保育者はその時間中、何気なく口にした独り言や手洗いに行くことも公にされてしまうからである。

また研究成果に期待できない、大学教員が乳幼児や保育を知っているとは思えないとの評価

が数人の保育者からなされた。それが共同研究の経験者であることから、この評価は実際にやってみた印象に基づくものと考えられる。保育者の信頼を損ねる何かがなされたのであろう。それを解明することは本研究ではできないが、ここで扱った範囲で検討してみよう。例えば、報告書の受け渡しはまず原因として指摘できよう。保育者の多くは自分の関わった研究の報告書を読みたいと願っている。しかし研究協力した保育者の約半数は、その報告書を手にしたことがなかった。研究者が報告書を保育者に渡さなかったのであろう。保育者は自分が観察対象になり、ビデオで収録されるのを我慢して研究に参加し、協力したとしても、報告書を読むことができなければ、自分はデータを提供するだけの共同研究者、研究協力者にすぎないという感想を持つのも当然であろう。また報告書を読むことができたとしても、その研究の目的や内容が自分の興味あるものとかげ離れていたら、読んでも参考にならないし、新しい知見を得る可能性も低い。こうしたことがあって、研究成果に期待できないと評価していると推測できる。さらに記述された意見に、「一場面の断片的なデータや1回の観察だけで結論を出すような研究が多く、参考にならないことがほとんどである」があった。詳しいことはわからないが、これが誤解によるものならば、事前に研究の意図や目的を伝えておくことが不足していたのではないだろうか。この指摘が誤解ではなく、何らかの理由で実際にそのようにしていたならば、研究者は乳幼児や保育を知らないとの評価につながるだろう。

その他に次のような内容の記述が複数あった。一つは共同研究といっても大学側が一方的に依頼するだけの研究であり、共同研究という言葉に抵抗がある。もう一つは研究協力の依頼が協力的な園に集中するように思う、である。前者は保育者が研究のパートナーとなっていないことを強く感じて、共同研究を押し付けられたと意識していることを示す。後者は保育者が1年に何度も研究協力の依頼をしてくるのを負担に感じていることを示す。こうした経験を重ね保育者は「研究者が園の都合や立場を考えないで、一方的に参加や協力を求めてくる」との認識を持つようになり、次第に研究者を信頼しなくなったと推測する。

保育者は研究者やその保育研究に厳しい評価をしながらも、研究協力には好意的であった。それは保育者が乳幼児を指導する専門職として、指導技術の向上はもちろん、保育に関連する知識を獲得し、より深く子どもを理解したいと考えているからであろう。

2. 研究者の研究実施上の留意点

保育実践現場の外にいる研究者が保育研究を実施する場合、保育者の協力は必要不可欠である。記述の中に、「保育研究を通して、研究者からも保育現場を理解してもらい、時には具体的な事例を大学の授業の中で取り上げて、学生が保育を実践的に理解できるようにして欲しいし、現場の保育者も研究者と事例をディスカッションすることで自分自身の考えを深め、資質の向上を計りたい」という内容の意見があった。これは保育者が研究者の行う保育研究に参加、協力することを通して専門的な資質を高めたいと期待していることを示す。そうであるなら研究への参加・協力が保育者にとってより多くの意義を持つようにすることが望まれる。そのために研究者が研究を実施するに当たり、留意しなければならない点について検討する。

まず研究の目的を保育者に説明し、その意図を理解してもらうことから始まる。予想される成果が分かるならば、それを伝えることも必要であろう。研究の目的によっては、その意図を保育者に説明することがためられることがある。例えば、保育者の働きかけと乳幼児の行動との関連の検討などように、保育者も研究対象とする場合、その研究の意図や目的をすべて

保育者に伝えることは、その心理にバイアスをかけ、行動に影響を与えると推測される。そうした場合でも保育者との対等なパートナーとして協力関係を築こうとするならば、基本的には保育者に目的を伝え、研究者の意図を理解してもらうべきであろう。研究者が研究の目的を伝えなければ、保育者を彼らにとってまったく必然性のない研究に協力させてしまうことを忘れてはならない。

観察の際に研究者は当たり前のようにオーディオビジュアル機器を使い、保育者や乳幼児の行動を記録する。保育者はそれを受け入れているが、抵抗感を持っている。しかしそうした抵抗感を小さくすることは可能である。例えば、記述された意見に「学生が自分の保育をビデオ収録した映像を、学生の研究内容と関係なかったが見せてもらったことで、自分の保育を客観的に見ることができて大変役にたった」があった。学生は映像記録を自分の研究目的にそって分析するのであるが、同時にその記録を保育者にも提供すれば、保育者は自分の必要に応じてそれを解釈して、そこから学ぶことができる。こうした経験を通して、保育者がオーディオビジュアル機器の使用を自分のためにも有効と判断すれば、その抵抗感を減少させていくであろう。すなわち研究者は映像記録などの資料をダビングして保育者にも渡し、必要に応じてそれに関する研究者の考えや解釈を伝えることである。しかし、それでも研究者の都合のみを優先するような安易な機器の使用は避けるべきで、事前に保育者に研究意図を伝えると同時に十分な検討、協議をすることが必要である。大学などの附属園ではその設置目的から、そうした協力を受け入れるのが当然とされる傾向があろう。しかし保育者の心身に過重に負担をかける方法での資料収集が許されるわけではないのである。

次に協力的な特定の園に研究協力の依頼が集中するという件を検討する。同じ大学に所属する複数の教員が特定の園に協力を要請することが起きるとすれば、それはそれぞれの教員が互いの研究の実施状況を知らないからである。それを避けるには各自の研究実施計画や予定を公開するなど、相互に状況を把握できるようにするのである。しかし、それがなかなか実行できないことが多い。それは個人的な事情ではなく、教員の研究活動は独立性が強く、あまり同僚教員の動向に関心を向けないという仕事上の特性によると考えられる。それでも教員の都合を容認して、要請が集中したら園の方から断ればよいというのではあまりにも身勝手である。少なくとも外部の園に協力を依頼したら、その内容と期間を互いに連絡すべきである。

記述に「研究協力の依頼が園の行事が多くある2学期に集中して、断る場合もある」という意見があった。卒業研究の資料収集はその時期に行うことが多いのは確かである。しかし資料収集のおおよその時期は研究計画の作成時に想定される。おおよその計画を立てる際に、園の方に向いて指導計画、行事予定を教えてもらい、それに対応したプランを作り、保育者の承認をもらっておくことが必要である。保育研究は大学教員や学生が報告書にまとめるために行われるのではない。子どものために行われるものである。乳幼児の生活を乱すような、またそれを支える保育者の活動を妨げるような資料収集はやるべきではない。

協力してもらった研究の結果を研究者が保育者にまったく報告しない場合がかなりあった。これでは保育者は研究協力が単に資料を提供するだけで、結果のフィードバックを得られず、研究を通して何かを学ぶこともできないのである。研究者は報告書にまとめたら協力した保育者に読んでもらえるように必ず渡すべきである。そして必要に応じて研究成果を口頭でも説明することが望まれる。しかし、生データの受け渡しには注意が必要である。例えば、保護者や保育者を対象にした研究で、得た資料を研究以外に使用しないと約束したものはそのように扱

い、保育者にも園の責任者にも提供するべきではない。乳幼児の発達検査や行動記録など、保育資料としても価値のあるものについては、保育者が必要とするならば生データを渡すことを前提にして、その要望を聞いて資料収集してもよいだろう。

最後に保育者は資料提供者、観察対象者ではない。研究実施において研究者と保育者は役割と機能に違いはあるが、乳幼児にとってよりよい保育を追究する対等なパートナーであることをここで確認したい。研究者はこれに留意して保育者とパートナーとしての関係をつくるように努力することが望まれる。

文 献

- アメリカ心理学会. (1996). サイコロジストのための倫理綱領および行動規範 (富田正利・深澤道子, 訳). 日本心理学会. (The American Psychological Association (1992). Ethical principles of psychologist and code of conduct. *American Psychologist*, 47, 1597-1611.)
- 岸井勇雄. (1997). 保育の研究と倫理を考える視点. 佐々木保行・井上誠子 (企画), 準備委員会企画シンポジウム2:保育の研究と倫理, 日本保育学会第50回大会研究論文集, 45.
- 久世妙子. (1997). 心理学の分野から保育研究に関わる視点. 佐々木保行・井上誠子 (企画), 準備委員会企画シンポジウム2:保育の研究と倫理, 日本保育学会第50回大会研究論文集, 46.
- 大豆生田啓友. (1997). カンファレンスとしての実践研究. 渡辺英則 (企画), 自主シンポジウム14: 保育に生きる実践研究とは, 日本保育学会第50回大会研究論文集, 87.
- 高杉展1997 物語るということの意味. 渡辺英則 (企画), 自主シンポジウム14: 保育に生きる実践研究とは, 日本保育学会第50回大会研究論文集, 87.

謝 辞

本研究を実施するにあたりまして、上越市にあります上越教育大学附属幼稚園、高田幼稚園、ひがし幼稚園、真行寺幼稚園、マハヤナ幼稚園、いずみ幼稚園、長岡市にあります白ゆり幼稚園、中沢白ゆり幼稚園、大島白ゆり学園、そして新潟市にあります県立新潟女子短期大学付属幼稚園、旭が丘幼稚園、まるみ幼稚園、坂井輪幼稚園、坂井輪東幼稚園の先生方にご協力をいただきました。心よりお礼を申し上げます。

Features of Preschool Teachers Cooperating with Professors and Students in Practical Studies :How Do They Evaluate Academic Researches ?

Ryohei MARUYAMA* · Akiko HARANO**

ABSTRACT

This study examined the research activities of professors and students carried out in preschools, and aimed to elucidate preschool teachers' thoughts and critical evaluations of these activities. We analyzed questionnaires answered by 126 preschool teachers.

The main results were as follows: First, most preschool teachers did not like to be monitored and videotaped. Second, professors and students often did not report their results to preschool teachers who cooperated with them. Third, preschool teachers did not always place reliance on professors. Based on these, we have considered several points to which professors and students should pay attention when they engage in researches with preschool teachers.

* Division of Early Childhood Education

** Department of Early Childhood Education, Niigata Women's College